平成 29 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

文化芸術による持続可能なまちづくり

～フランス・ナント市の事例から～

調査地 ： フランス ナント市

調査日 ： 平成 29 年 6 月 29 日、30 日

平成 29 年 10 月

一般財団法人地域活性化センター

総務企画部 企画・コンサルタント業務課 川上 篤

構成

１．　はじめに　P.1

２．　序論
（１）　国内の文化芸術政策の現状と課題　P.1
（２）　調査研究の目的　P.2

３．　本論
（１）　ナント市の概要　P.2
（２）　ナント市の歴史　P.3
（３）　「リューユニーク」について　P.3
① リューユニークの歴史　P.4
② 施設について　P.5
③ リューユニークの特徴　P.6
（４）　「ラ・マシーン・ド・リル」について　P.7
（５）　「ボワイヤージュ・ア・ナント」について　P.8
（６）　「日仏都市・文化対話」について　P.9
（７）　効果と今後の課題　P.9

４．　結論　P.10

５．　おわりに　P.11

1. はじめに

近年日本国内では人口減少が加速化し、少子高齢化や過疎化、産業の担い手不足など様々な課題が顕在化している。

特に、地方においてはそれらの課題が都市と比較してより顕著になっており、地方自治体は地方創生の実現に向けて、人口ビジョンと総合戦略を作成し、「ヒト・モノ・カネ」が循環する持続可能な地域づくりに取り組んでいる。

こうした中、文化芸術を取り入れたまちづくりが全国各地で注目されており、様々な地域で芸術祭などのアートイベントが開催されている。

これまで「文化」や「芸術」は保護し、保存するものとして扱われてきた。しかし、近年それらの持つ創造性が、地域資源の魅力化、観光振興、移住者の増加、そして経済効果につながると期待され、多くの自治体の施策に取り入れられるようになってきた。しかし、注目されているからという理由でまちづくりに文化芸術を取り入れてしまい、様々な問題が生じている例があるということも事実である。

そこで、一時は失業率 20%という危機的状況に追い込まれながらも、文化芸術によるまちづくりを 30 年に渡って推し進めることにより、「ヨーロッパで最も住みやすいまちの一つ」とまで言われるようになったフランス・ナント市のまちづくりについて調査研究を行った。

2. 序論

（1） 国内の文化芸術政策の現状と課題

現在、国内では「瀬戸内国際芸術祭（香川県高松市　他)」を筆頭に、「大地の芸術祭（新潟県十日町市)」「北アルプス国際芸術祭（長野県大町市)」「奥能登国際芸術祭（石川県珠洲市)」など様々なアートイベントが各地で催されている。

私も瀬戸内国際芸術祭に足を運んだことがあるが、話題性も年々高まり、観光客の増加による経済効果も大きく、文化芸術によるまちづくりとしては国内では最も成功した事例の一つと言えるだろう。

しかし、国内で催されている他のイベントを見てみると、国指定の重要文化財に現代アートを施したことにより地域住民からの反発が相次ぎ、アートを撤去せざるをえなかった例も生じている。

▲瀬戸内国際芸術祭の様子

この例では住民から「歴史的な街並みにそぐわない」といった批判が多かったということだが、文化芸術によるまちづくりはその地域の活性化に有効である反面、やり方を間違えれば批判の的になりやすいのではなかろうか。

したがって、事前にその地域の歴史や文化を十分に把握するとともに、地域住民を巻き込むことが必要ではないかと考える。

（２） 調査研究の目的

本報告書では、まずナント市が文化芸術によるまちづくりをどのように推進し、荒廃したまちを魅力的なまちへと変えていったのかを明らかにする。

また、文化芸術によるまちづくりを一過性ではなく持続的なものとするために必要な条件とは何なのかを考察したい。

そして、この報告が、現在アートイベントなどによるまちづくりを行っている、あるいはこれから行おうと考えている全国の自治体への一助になればと考えている。

３．本論

（１）ナント市の概要

ナント市はフランスの首都パリの南西 389 ㎞に位置し、面積は 65.19 ㎢、人口は 292,718 人で、フランス第 6 の都市である。パリからは TGV（日本でいう新幹線）を使えば 2 時間で訪れることができる。市の気候は温帯海洋性気候に属し、年間の平均気温は 12℃、年間平均降水量は 820 ㎜である。

フランスで初めて LRT（新型路面電車）を導入したことでも有名で、その路線はフランスで最も長い。また、市の中心部は車の速度を規制する「ゾーン 30」を設けており、歩行者優先のまちづくりを行っている。車と公共交通を上手く織り交ぜた「混合交通」という公共交通政策は優良事例として世界的に高く評価されている。

産業では IT 関連などのサービス業が主産業となっており、その他に資材や食品加工、航空産業、造船業なども盛んである。

▲ナント市内の様子

▲市内を走る LRT

（２）ナント市の歴史

ナント市は、16 世紀にフランスに併合されるまではブルターニュ公国の首都であった。1598 年にユグノー（宗教）戦争を終結させるために発せられた「ナントの勅令」は日本でも広く知られている。

18 世紀にはナント港での三角（奴隷）貿易で巨万の富を得て栄華を極める。

しかし、その後、港湾機能のナント港からサンナザール港への移動に伴い、主要工場や造船所も軒並み移転してしまったことから、失業率が 20%以上に達するなど衰退の一途を辿った。1989 年、その後の文化芸術政策のキーマンとなるジャン・マルク・エロー氏（以下「エロー氏」という。）が市長に就任した。エロー氏は「文化」を柱にした都市再生プロジェクトを掲げ、ナント市の復興に乗り出す。市の文化局担当者によれば、この時「ナント市に文化的目覚めが起きた」とのことである。

エロー氏は、市の予算の 1 割（約 60 億円）を文化政策に配分し、文化局に職員全体の 7%を配属するなど精力的に政策の推進を図り、壊滅的な状態にあったまちを 30 年で「ヨーロッパで最も住みやすいまちの一つ」と言わせるまでに発展させた。

次節では具体的なナント市の文化芸術政策について論じる。

（３）「リューユニーク」について

かつてビスケット工場だった施設が文化芸術だけではなく生活の拠点として機能するようになった「リューユニーク」について紹介する。

現在のリューユニークは市民の憩いの場となっているほか、市外からの来場者も多く、年間利用者数は 70 万人以上に上る人気スポットである。

▲リューユニーク外観

▲リューユニークのオフィス

① リューユニークの歴史

1895 年、ナント市内に「LU（ルフェーブル・ユティル)」というビスケット工場が建設された。工場は 3 階建てで約 8000 ㎡（東京ドーム 1.7 個分）という非常に巨大なものであった。

当時、ビスケットは大変高級な菓子で上流階級の食べ物であったが、この工場が建設され、ビスケットが大量生産できるようになったことから、一般庶民の菓子として食されるようになったと言われている。

LU は当時の食品業界には珍しく、ビスケット箱のパッケージを国内の著名な芸術家とコラボして作成するなど、食文化だけではなく文化芸術の発信地として機能するとともに、まちに賑わいをもたらす拠点としての役割も果たしていたのである。

しかし、1980 年代になると、前述の港湾機能などの移転に伴い、LU の工場も移転してしまったため、それまで賑わっていたナントのまちは衰退を余儀なくされた。

まちの賑わいを失ったナントであったが、1990 年代に、この廃工場に目を付けた CRDC（ナント市国立舞台）のジャン・ブレーズ氏（以下「ブレーズ氏」という。）が文化イベントの本拠地としてこの場を使い始め、かつてのように工場の周りに賑わいや活気が蘇ってきた。ブレーズ氏はエロー氏と同じくナント市の文化芸術政策を推進してきたキーパーソンの一人である。

同氏が当時のエロー市長に、市の文化事業に対して様々な提言を行ったところ、その提言を受け入れ、1995 年に市がビスケット工場を買収することになった。

そして、この工場を「地域密着型の現代アートの実験場」として、2000 年にオープンさせるに至ったのである。

「リューユニーク（唯一の場所)」と名付けられたこの施設は、市が CRDC に運営を委託している。

ここは文化芸術の拠点としてだけではなく、住民の「生活の場」としての位置付けもあり、誰でも気軽にふらっと立ち寄れるような場所となっている。

② 施設について

施設の中には文化施設としての劇場や音楽ホール、展示スペースのほか、若手アーティストへの貸しスペース、玄関口となる 1 階には書店や雑貨屋、レストラン、バーが併設されている。

これは CRDC が、施設の一部を民間事業者等に有料で貸し出して　おり、そこに様々な店舗がテナントとして入居するという方法で運営している。

なお、地下にはイスラム系をはじめとした女性に大人気という「ハマム（スチーム式の風呂)」がテナントとして入っている。

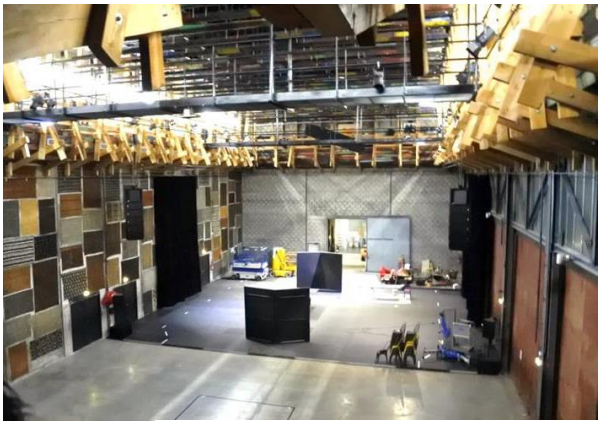
バーやレストランは午前 11 時から翌午前 3 時までの営業で、木、金、土曜日は DJ

による音楽イベントを開催している。このイベントへの参加をきっかけに、若者や文化にあまり興味がない人でも自ずと文化施設にアクセスできる仕組みを取り入れている点が特徴的である。

また、展示スペースで年に 3 回ほど大きな企画展を実施しており、私たちがこの施設を訪れた際は H・A・ギガの「エイリアン展」が開催されていた。この企画展は来場者も多く、毎回大人気なのだという。

この施設で開催されるイベントや展覧会などはほとんど入場料無料である。これは、より多くの人が文化にアクセスしやすい環境を作るためであり、国や市の補助金、テナント収入を活用して収支相償で運営している。

▲リューユニーク内にあるバー



▲劇場内の様子

③ リューユニークの特徴

リューユニークの特徴として、まず一つは壁や床の一部を改修せず、当時のまま残していることが挙げられる。まちのシンボルであったビスケット工場をまちの歴史の一部として残そうという思いをこのような形で表現している。

また、劇場の壁をラグやドラム缶で覆っているが、これは三角貿易が栄えていた当時にアフリカからもたらされたラグやドラム缶を想起させるためのものである。

そして、天井の木材は、使用されなくなった船の廃材を利用しており、以前このまちが船による交易で栄えていたということを示している。

これらの工夫により、市民や利用者にこの施設が市の歴史や文化のうえに成り立っていることを想起させ、地域に根差した施設であるということを強く印象づけている。

さらに、施設の外壁についても面白い仕掛けがある。外壁にはいくつものドラム缶が埋め込まれているが、これは施設がオープンする 1 年前の 1999 年 12 月 31 日、

市民が自分の大切な物を持ち寄ってドラム缶に収納し、タイムカプセルとして埋め込んだものである。

タイムカプセルは、100 年後の 2100 年 12 月 31 日に、埋め込んだ人々の子孫によって掘り起こされることになっているという。

施設スタッフのエビス・ジョルダン氏は「これで向こう 100 年間はこの施設を残す必要性が生じた」と笑いながら話してくれたが、このような巧みに住民を巻き込む取組が、住民に自分たちが関与しているという当事者意識を芽生えさせ、施設に愛着を持つという効果をもたらしている。

▲外壁に埋められたタイムカプセル

▲「エイリアン」展の様子

（４） 「ラ・マシーン・ド・リル」について

市の中心部からロワール川を隔てた対岸にナント島と呼ばれる中洲がある。ここは 1950 年代には造船所などが集積していた地域であるが、造船業の衰退などにより 2000 年代になると市民が近づくのを躊躇するような場所になってしまった。

そこで市はこの場所をアートスペースとして活用するとともに環境に配慮した「緑の島」にすることを掲げ、プロジェクトを実行した。

このプロジェクトは実行前から市民との協議の場が設けられ、また設置物などのデザインについても地元のデザイナーやクリエイターなどが携わるなど、多くの市民を巻き込んだものとなった。

そして、このプロジェクトの中心となったのが、各地を転々としながら巨大なカラクリ仕掛けなどのパフォーマンスを行っている「ロワイヤル・ドゥ・リュクス劇団」

である。同劇団は、これまでの経験を活かして、このナント島に壮大な機械仕掛けのテーマパーク「ラ・マシーン・ド・リル」を開設し、市から運営を受託した。

「ラ・マシーン・ド・リル」は現在ナント市を象徴する顔となっており、世界的に高い評価を受けるまでになっている。

施設内は、機械仕掛けの巨象「グラン・エレファン」が施設内を闊歩しており、ほかにも機械仕掛けの巨大クモがいたりと、普段味わえない不思議な世界を体感することができるようになっている。

これらの仕掛けは今後も随時新作を制作中で、今後も人気を維持すると思われる。

また、機械仕掛けという施設のテーマには以前この島が重工業で栄えていたということを示す意味が込められている。市の歴史を鑑みたうえでの施設だからこそ、まちに溶けみ、住民たちの理解も得られていると考えられる。

▲ラ・マシーン・ド・リルのグラン・エレファン（巨象）

（５） 「ボワイヤージュ・ア・ナント」について

ナント市では現代アートを活用して地域の魅力を再発見し、引き出すとともに、それを観光に結び付ける取組も行っている。

「ボワイヤージュ・ア・ナント（ナントへの旅）」は、市内中心部などで毎年夏に開催されているアートイベントで、市民だけでなく、市外、国外からの観光客も多数来場し、賑わいを見せている。

イベント期間中（2017 年は 7 月 1 日～8 月 27 日まで）は、市内の各所にアート作品を設置したり、ナント大公城の城壁に滑り台のアートを設置し、子どもも楽しめるスペースを設けている。

また、特徴的なのは展示されているアートに観光客がアレンジを加えることができることである。もちろん全ての作品にアレンジが可能なわけではないが、観光客がイベントの当事者になれるというのはユニークな取組である。さらに、市内の道路には一本の線が引いてあり、これを辿ると主な作品を一通り鑑賞できるといった工夫もなされている。

▲市内に展示されているアート作品

その他、市内の飲食店や雑貨店なども自主的に店の前をデコレーションしたり、作品を軒先で展示したりしており、関係者だけではなく、市や市民が一体となってイベントを盛り上げようとしていることが伝わってくる。

▲道路に描かれている一本の黄色い線

（６） 「日仏都市・文化対話」について

ナント市は、日本を含む世界各国との文化交流にも力を入れており、文化芸術政策を他国の都市と連携・協力しながら推進していこうとする意識が非常に強い。

2007 年からは、友好都市である新潟市とともに 2 年に 1 度「日仏文化対話」という大イベントを開催している。2017 年は 10 月 19 日（木）～22 日（日）の 4 日間で開催され、韓国や中国、そして大阪市など日本の多くの都市も参加して行われた。

さて、この文化対話であるが、今年度は日本のアールブリュット（アウトサイダーアート）展「木漏れ日」が開催されたり、ナント大公城では能や浮世絵展が披露されるなど、日本の伝統文化尽くしのイベントとなった。

また、このイベントは文化芸術のお披露目の場としてだけではなく、文化芸術が社会問題や地域問題にいかにアプローチできるのかを各国が議論する場ともなっており、日本だけではなくヨーロッパでも大きな問題となっている「高齢化、高齢者の増加」をテーマとしてディスカッションが行われた。

このイベントの事務局は地域経済の発展と地域開発を担う公施設法人「ナント・メトロポール」が担当している。フランスでは基礎自治体であるコミューン（ナント市もコミューンである）の規模が日本と比較して小さいため、多くのコミューンが課税権を有する広域行政組織に加入している。ナント市周辺 23 コミューンでは「ナント大都市共同体」を形成していたが、2015 年に「ナント・メトロポール」に移行したのである。

（７） 効果と今後の課題

このように文化芸術政策に多額の予算やマンパワーを投入し、様々な事業に取り組んでいると、議会や住民からの反対や批判なども当然考えられるが、市の担当者によればそのようなことは無いということである。

これは、政策形成に当たって早い段階かた住民を巻き込み、当事者意識を持たせる

ことで、文化芸術によってまちを盛り上げていこうという意識が醸成されていることも大きく寄与しているものと考える。

そして、政策の立案・実施に当たり、ナント市の歴史や伝統を重視し、そのエッセンスを施設整備などに上手く取り込んでいる点も極めて重要である。

さらに、文化との関わりが希薄になりがちな若者世代をリューユニークのように巧みに文化に触れさせるとともに、まちのにぎわいにつなげている点も評価できる。

ナント市の人口は、2008 年～2013 年の間で 0.7%増加しており、特に若者の増加が目立つ。さらに、0～29 歳の人口が約 123,000 人で全人口の 42%という驚異的な数字である。これは、魅力的なまちに若者を中心とした人々が集まってきている証拠であるといえる。

ナント市の文化芸術政策は、市民への様々な効果のみならず、観光誘客に対する効果も大きい。ボワイヤージュ・ア・ナントなどの観光分野では、国外からの旅行者（主にイギリス、ドイツ、スペイン）の滞在日数が 1.75 日と前年度より 0.13 日増えている。年々滞在日数が増えているとのことであり、ナント市が国境を越えて人気のある都市であることが分かる。

このように、文化芸術という一つのコンテンツに多様な人たちが関わり合い、そして市民自らが自主的にまちづくりに参画しているという当事者意識が、一過性ではない持続的・発展的なまちづくりにつながっているのではないだろうか。

一方で、これらの政策には課題も存在する。

まず、文化芸術政策の膨大な予算を巡り、文化関係団体間で予算の奪い合いが起きているとのことである。ただし、競争によってプロジェクトの質が向上するという効果も期待できるため、プラスに作用している面もある。

また、リューユニークについては、老若男女問わず、誰でもアクセスできるというコンセプトを打ち出しているが、バーや書店などは主に若者が、劇場や音楽室は高齢者が多く利用する傾向があり、まだ両者に隔たりがあるようだった。将来的には若者と高齢者が同じスペースで交流できるような空間が理想だと担当者は語っていた。

４．結論

ここまでナント市の文化芸術政策について事例を挙げながら報告してきたが、この政策を通じまちづくりの成功の要因について整理する。

まず、第一は市の歴史や伝統が文化芸術によって、まちの魅力や親しみに昇華できているところである。まちの歴史や伝統を取り込んだリューユニークの改修やラ・マシーン・ド・リルの整備などがその良い例である。

まちの歴史や伝統を深く理解したうえで、政策に反映している点が市民や観光客に評

価され、まちの持続的な発展につながっていると考える。

また、キーパーソンとしてまちの歴史や伝統を深く理解し、政策を推進してきたエロー氏とブレーズ氏の存在は大きい。30 年という長い時間をかけて我慢強く政策を推し進めてきた２人のリーダーは、この市にとって無くてはならない存在である。先を見通す力と明確なビジョンがあったからこそ、長い年月をかけてナント市を再生できたに違いない。

さらに、ナント市の文化芸術政策が市民を巻き込み、彼らに当事者意識を持たせる工夫がなされていることも大きな要因である。リューユニークに若者が行きやすい環境を整備したり、またタイムカプセルを壁に埋め込むことで市民の当事者意識を醸成したことや、ボワイヤージュ・ア・ナント期間中に飲食店が自主的にアート作品を展示することなど、市と市民が一体となってまちを盛り上げている状況は特筆すべき点と言える。

最後に、同じ理念やビジョンを持つ世界の都市が連携し、共に文化芸術を用いてまちを持続的に発展させていこうというネットワーク作りも評価できる点である。昨今の日本においても自治体単独ではなく広域連携によるまちづくりの重要性が説かれているが、ナント市においては早い時期からネットワーク形成に乗り出し、「日仏都市・文化対話」というイベントを通して、お互いの情報交換や相互連携に取り組んできた。

これらが、ナント氏が文化芸術政策の先進地として世界中から注目され、一過性ではない持続可能なまちづくりを成功させている要因だと考える。

５．おわりに

ナント市の事例から日本の地方自治体が文化芸術政策を行うにあたり、学ぶべきことについて述べたい。

まずは、それぞれの地域を顧みることから始めるべきではないだろうか。日本で新しい政策を行うとなると、今あるものを壊すことで、あるいは否定することから取り掛かることが多い。しかし、ナント市では今あるもの、ずっと残ってきたものを新しい政策に活かすということに重点を置いており、負の遺産と思われがちなものであってもプラスの財産に変えて活用している。

日本の各地域にも必ずその土地独自の歴史や伝統があり、それに「気づく」ことがまちづくりの第一歩となるのではないかと考える。この「気づく」ということも行政だけではなく、住民と一緒にあるいは、住民主体で行うことが重要である。行政はこの「仕掛け作り」に知恵を絞る必要があるだろう。

日本においては、文化芸術政策というものはすぐに効果が見出せないため、行政予算が確保しにくい環境である。ただ、今回ナント市の例を見ても分かるように政策がまちづくりに反映されるまで 30 年近くの時間を費やしている。もちろん政策に KPI を設定し

短期的に評価を行っていくことも必要なことではあるが、文化芸術政策は 1～2 年のスパンではなく、長期的な視野に立ったまちづくりの一環として考えていく必要があるだろう。

私の派遣元である熊本県菊池市でも、人口減少により増加している廃校や空き家を活用した地域活性化プロジェクトが進められている。その一つとして昨年 11 月に廃校になった小学校を利用して「アートフェス」が開催されたが、大盛況で市民からも高い評価を得たとのことである。菊池市でも少しずつ文化芸術を活かした取組が生まれ始めており、私もぜひナント市で学んだことを、地元に還元していければと考えている。

今回の調査研究に際して、快く視察を受け入れていただいたナント・メトロポールの Christine Renard 氏、リューユニックの Yves Jourdan 氏、そしてナント市との調整から通訳、滞在中の様々なサポートをしていただいた沼口久美子氏、フランスでの調査に助言をいただいた CLAIR の山本さやか氏ほか職員の方々に心から感謝申し上げる。

最後に、この貴重な機会を与えていただいた（一財）地域活性化センターと派遣元である菊池市にも感謝を申し上げ、報告の結びとしたい。

【参考文献等】

・野田邦弘（2014 年）「文化政策の展開 - アーツ・マネジメントと創造都市 - 」
学芸出版社
・福武總一郎、北川フラム（2016 年）「直島から瀬戸内国際芸術祭へ
- 美術が地域を変えた」現代企画室
・藤田令伊（2009 年）「現代アート、超入門！」集英社
・菅野幸子（2004 年）「フランス蘇るナント - 都市再生への挑戦」国際交流基金企画部
・渡部　薫（2012 年）「地方都市における創造都市戦略の可能性～熊本市を対象に～」
日経研月報